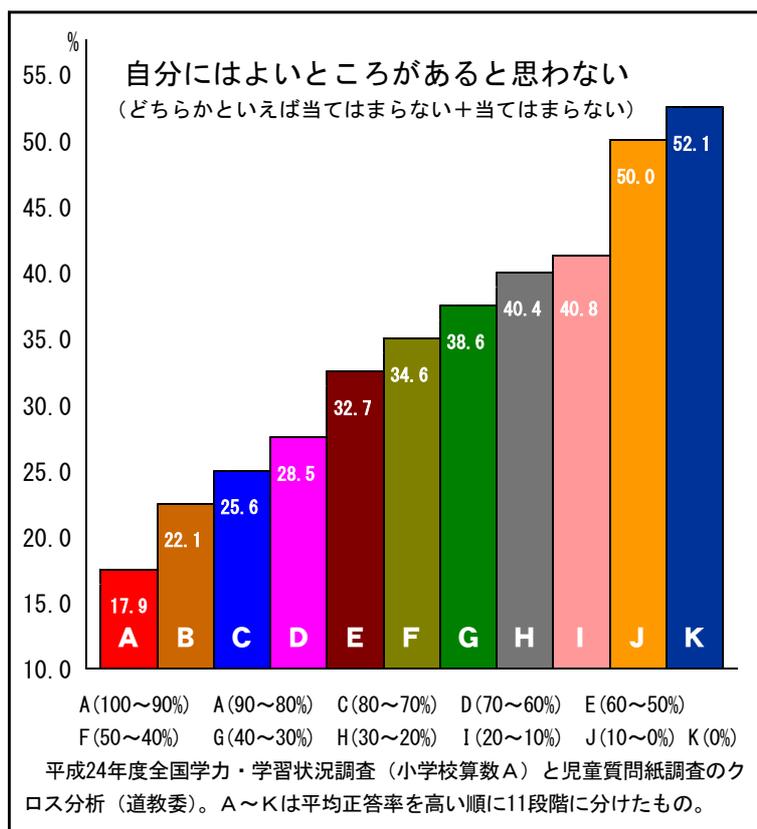




## 自己肯定感の奥深さ

浜中町立茶内小学校長 富田直樹



左のグラフは、平成24年度に北海道教育委員会が全国学力・学習状況調査の調査結果（小学校算数A）と児童質問紙調査をクロス分析して、その結果をまとめたものです。平均正答率が低くなればなるほど、自己肯定感が低い児童の割合が高くなっていく傾向がはっきりと分かります。

当時の北海道は、子どもたちの学力向上に深刻な課題を抱えていました。そこで、全道の校長、教頭、主任クラスの教員、市町村教委の専門的教育職員が参集して、学力向上策について協議等する研修会等が頻繁に行われ、その中でこのグラフが活用されました。

しかし、このグラフの本来の意図はうまく伝わらずに、学力向上のためには、自己肯定感を高める必要があります、そのために「ほめる」「ほめられる」ことが大切との認識が広がり、学校教育指導訪問や公開研究会

で公開される授業において、とにかく子どもたちを「ほめる」場面を多く見るようになりました。「ほめる」だけで学力は向上するのでしょうか。

今年度の全国学力・学習状況調査から、本校の児童は、学力も自己肯定感も高いことが分かります。日常の授業参観において、課題解決に困り感をもっている子どもたちの様子をよく見かけます。その様子から、「自分はダメだ」という自己嫌悪感や「仕方ない」という諦めの姿は感じられません。むしろ、「自分はまだまだ頑張れる、何とかしよう」として、自己解決を続けたり、友達と協働したりして課題解決に挑み続けます。そうした経験を毎時間、積み重ねることで、「自分はやればできるんだ」という自己効力感を手にしているように見えます。教職員は、課題解決に困り感をもっている子どもがいたとき、すぐに答えを伝えたり、ヒントを与えたりはしません。見守ってくれています。また、大して努力もしていないのに、安易にほめたり、認めたりしません。何とか課題解決をしようとする頑張っている姿を認めてくれています。そして、何ができてできなくても、その子ども自身のことを認めてくれています。自己肯定感はどのように育まれるのか、その答えは、子どもたちと教職員の姿勢にあるのだと思います。